

営みの 景に 出会う。



秋になり、水温が低くなると鮎は産卵のために川を下り始める。その落ち鮎を狙うのが瀬張り漁だ。漁師は川の中にずぶずぶと入り、魚影を確認しながら網を打つ。川蟹は6・7月が禁漁。穫れた蟹は茹でて味わったり、飯と一緒に炊き込んだりする



肱川は
みんなの遊び場？
いいえ、学び場です

8月下旬、肱川中流にある森山の河川敷には、カラフルなカヌーが集結する。「大洲市カヌーツーリング大会」の参加者が、スタートの合図を今か今かと待っているのだ。平成2年から始まっ

たこの大会は、5人が1チームとなり、約15キロのコースを5区間に分けて、カヌーをバトン替わりにリレーをつないでいくもの。参加者は年々増えており、50挺以上のカヌーが、アメンボのように川面をすいすいと走る様は爽快だ。競技終了後は全員で肱川の美化活動に汗を流す。参加者は肱川に親しみ、仲間との絆を深めながら、多くのことを学

ぶことができる。このほか、8月初旬には鹿野川湖を舞台にした「ドラゴンボート大会」も催される。こちらはこぎ手8人、かじ取り1人、太鼓を打ち鳴らす伴奏1人の10人が1グルーブとなって行うタイムトライアルレース。往復450メートルの白熱のレースに、選手はもちろん見物客も大いに盛り上がる。

恵みと育みの肱川。

鮎、川蟹、鰻、鰈 天然自然の食料庫

肱川は恵みの川。この川で鮎や川蟹、鰻、鰈などの漁をする川漁師は、1000人にも及ぶ。かつてはもっと多くの、それも専業の川漁師がいたが、環境の変化の中で川漁師の数は減っていき、そのほとんどが兼業だ。それでも、「肱川はコンディションが良く、良質の鮎が穫れる」と川漁師たちは胸を張る。漁期は魚種によって決まっており、鮎は6月1日から年末まで、投げ網や友釣り、毛針釣りなどが行われる。また、秋には幅5cmほどに割った竹を適度な間

隔を空けて川に打ち込み、産卵のために川を下ってくる落ち鮎をとらえる瀬張り漁が行われる。鮎は瀬張り（竹）を怖がって、上流へとUターンする。そこに投げ網を打つという伝統漁法だ。川蟹漁は蟹籠が、鰻漁はじんどう（地獄ともいう）という仕掛けが使われる。面白いのは鰈漁。四つ手網と呼ばれる仕掛けをあらかじめ川に仕込んでおき、サザエの殻を吊るした縄を上流から下流へとガラガラ音を出しながら引いて鰈を追い込む。決して、手間が少なくはない伝統漁法。だが、これからは肱川と仲良く暮らしていくためには汗を惜しんでほならないのだ。



川漁師として肱川をみつめる 中塚泰生さん

川漁師をして30年、肱川とともに暮らしてきました。つくづく感じるのは、肱川というのは本当に美しい川だということ。ここまで自然の状態を残した川は、全国でも少ないんじゃないかと思っています。私は川漁師と料理人を兼業していますが、自分が捕った川の幸を自分で料理し、お客様に喜んでいただくのが生き甲斐ですね。

*「がいな」は方言で「すごい」の意味